

仕事好きの管理職医師に捧ぐ

井上真智子

浜松医科大学地域家庭医療学講座／静岡家庭医養成プログラム

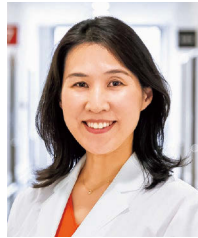
あなたは管理職ですか？ 仕事は好きですか？ あなたの部下は健康で幸せですか…？

臨床中心だった生活から、教育・研究、管理業務、その他名前の付かない諸々の仕事が増えてきて長らく経つが、時々ハタと悩むことがある。私は「仕事好きの管理職」であるが、どうやらちょっと迷惑な時があるようだ。さすがに深夜や休日に頻繁にメールを送ることは控えているが、時に新しいプロジェクトや企画を、「これ面白そうだからやってみない？」と声をかけても、若干引いた目で、そーっと断られることがある。「No」と言うのは大事なことだが、「学ぶチャンスなのにもったいないな」とギャップを感じてしまう。

もちろん皆、向上心がないわけでも、仕事を適当にやり過ぎたいというわけでもない。むしろ真面目に誠意を持って日々働いている。キャパオーバーでバーンアウトしないように、やるべきこととやらなくてよいことを判断し、時間とエネルギーを適切に配分して行動している。つまり若い世代のほうが、自分事としてのウェルビーイング意識が高い。意識を変えなければならないのは、中高年世代なのだということを痛感させられてきたこの数年である。

しかし、若い世代のウェルビーイングを守ろうとするあまり、組織として出すべき成果を犠牲にしてよいのだろうか？ やはり中高年世代の管理職が、諦観とともにカバーすべきなのだろうか？

本特集はそんな葛藤の中で生まれた。医療の質・安全、産業保健、人間工学・行動科学、キャリアの観点から、バーンアウト予防やウェルビーイング向上に向けて、どの世代の方にも【保存



版】としていただける内容となった。行き詰まり感のある管理職も、Well-being 1.0 から 2.0 へのパラダイムシフトに向けて¹⁾、「組織で取り組めることはたくさんある」と気づかれるのではないだろうか。

コラムでは8名の方に、ご自身の体験をストレートに語っていただいた。趣味との出会い、子育て、介護、自身の病、自分や他者との関わりを通し、人としての変遷を経て医師としてもまた深みを増す様は、間違いなく読者に勇気を与えるものであり、また自身のウェルビーイングについて新たな視点で考える端緒となるだろう。

そして冒頭の「ゲストライブ」では、米国家庭医療界のパイオニアであるジャネット・サウスポール先生に、その生き様を伺った。40年以上にわたり「人」をケアするというブレない姿勢とたゆまぬエネルギー、そして職場でもキャリアでも大切なことは結局何か、読者へ熱いメッセージを語っていただいた。

サウスポール先生を私に紹介してくださったのは、ミシガン大学の故マイク・フェターズ先生だった。米国ではメンターやコーチを持つことはよくあるようで、「あなたにはサウスポール先生がぴったりでは」とご紹介していただいたのだ。身に余る光栄であり、お話しする度に力をいただいている。今回、そのエッセンスを読者の皆さんと共有できた。きっとフェターズ先生も、また一つ大好きな日本に貢献できたと言って天国で喜んでおられることだろう。

文献

- 1) Shanafelt TD : Physician Well-being 2.0 ; where are we and where are we going? Mayo Clin Proc 96 (10) : 2682-2693, 2021. PMID 34607637